



真宗大谷派
赤野井別院

大恩寺



御上人教如

「むかしばなし」

赤野井浜近くの江口のあたりは、よいヨシ場でした。ここのヨシの葉は妙なことに葉のまんなかに、みな歯型がついたような斑点が出来ておりました。なんでも、蓮如さんという方が西への往来のとき、飢をしのぐのに、あんまりひもじいのでかまれたので、江口のヨシには蓮如上人の歯型がついたものと伝え聞いております。

【守山往来】

赤野井の浜に大きな柳の木が一本あります。むかし蓮如上人が赤野井の浜に着かれたとき、差出されたご飯に箸がなかったたので、柳の枝を折っておつかいになりました。あとで、柳の枝を元にかえすとて地面につきさされましたが、上下逆さまになったものですから、シダレ柳にかわったということです。

【守山往来】

今、箸塚として大切に保存しています。

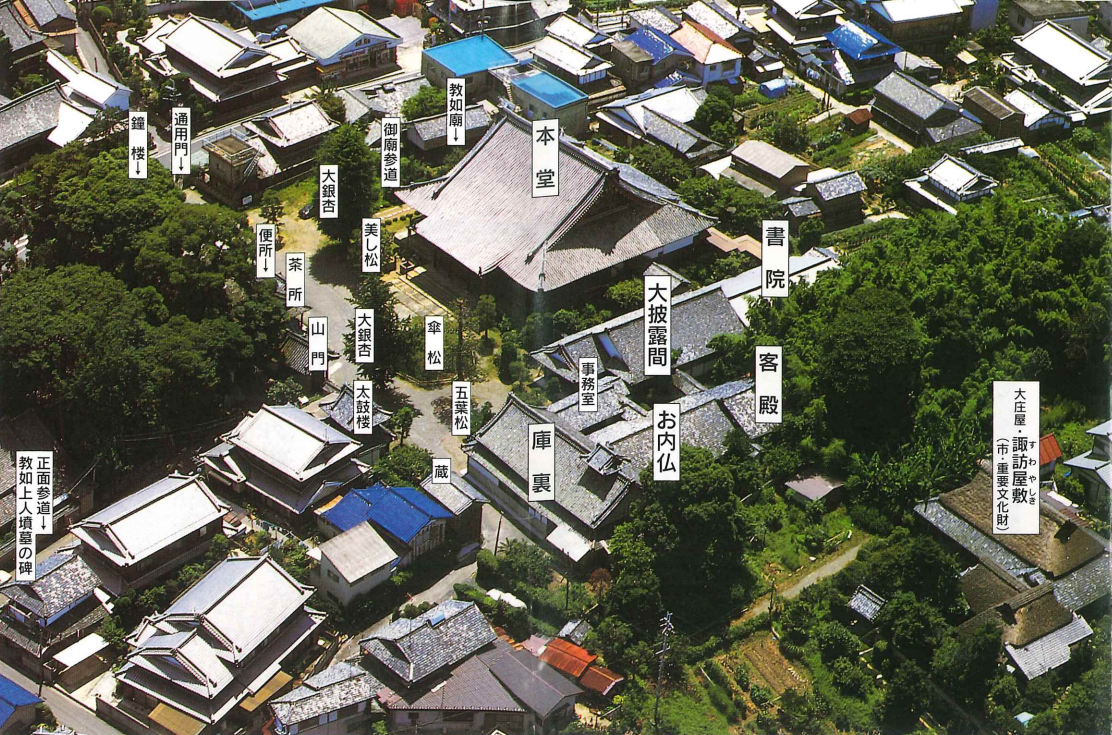
年中行事

教如上人忌 四月十五・十六日
 戦没者追弔法会 四月十六日
 夏御文拝読 八月六日
 永代経 八月七日
 報恩講 十月二十六〜二十八日
 月例法要 (十二〜十三時)
 教如上人御命日 毎月五日
 宗祖御命日逮夜 毎月二十七日
 その他 修正会・春秋彼岸会・盆会

真宗大谷派赤野井別院

〒五二四一〇〇六一
 滋賀県守山市赤野井町三三八
 TEL・FAX(〇七七)五八五一・一八六九

●交通の便 JR守山駅より近江バス
 「赤野井別院前」下車



「蓮如上人と赤野井」

湖南景勝の地、赤野井のあたりは、古くから開け、肥沃な土地でありました。中世には、すでに自治能力のある村むらが成立していましたが、赤野井を中心として真宗の教えが広がってきました。「この地方で親鸞聖人（一一七三—一二六二）の教えを相承した一向宗（真宗）徒のことが京都の人びともよく知られ、『蔭涼軒日録』など当時の日記にしばしば登場します」

金森の道西（二三九九—一四八八）は、本願寺第七代存如上人（二三九六—一四五七）に帰依して、本願寺に奉仕いたしました。また、若年の蓮如上人（一四一五—九九）の本願寺中興の熱意に感激して、その生涯を蓮如上人にささげました。

窮乏のどん底にあった大谷本願寺に、ようやく宗門再興の兆しが見え始めたとき、山門の僧徒による本願寺破却という寛正の法難（一四六五）を呼び起こすことになりました。この法難を避けて、蓮如上人が祖像を背負うて金森にやってこられると、ここまでの山門の徒が攻めてきました。赤野井からも応援にかけつけ、多くの門徒が奮戦して上人をお護りしました。

ことが収まって、再び上人の教化活動が始まり、やがて湖南地方には多くのお弟子も生まれ、今日の本願寺教団の基が築かれました。上人は、教化巡錫のためにしばしば赤野井と堅田を往返されました。そのことを物語る蓮如堂、箸塚などの遺跡や、浜辺の雑草一本にも上人とのかかわりをもつ昔話が伝わっています。（↓『むかしばなし』）

「教如上人と赤野井」

教如上人（一五五八—一六一四）は顕如上人のご長男であります。石山本願寺（いまの大阪城のあたり）にあって、十三歳から二十三歳までの十一年のあいだ（一五七〇—八〇）、父の顕如上人をたすけて織田信長の軍勢と戦い、智略をもって相つぐ法難から本願寺を守り通されました。

信長の没後、豊臣秀吉の知遇を受け、本願寺は大阪の天満の地から京都堀川に移転しました。翌、文禄元年（一五九二）父顕如上人の急逝によって、三十五歳で本願寺の第十二代を継がれました。しかし間もなく故あって、弟の理広院（西方の准如上人）にその職を譲られました。

ところが、本願寺を守られた傑僧教如上人への信望は厚く、金森の大乱以来はぐくまれた反権力の機運が、湖南の地に湧き起こりました。中でも、赤野井の了誓（一一六一—



影附蔵
真下所
人年別
上五東
如徳野
教正赤

三）、矢島の浄恵（一一六一—一一六二）、同じく西照（一一六一—一一七一）などが中心となつて上人のために力を結集しました。こうして赤野井・矢島方の人びとは上人の手足となつて画策しました。のち、慶長八年（一六〇三）の、本願寺東西分立の前後、烏丸本願寺のご普請工作にもいろいろお手伝いいたしました。

「赤野井御坊大恩寺」

赤野井に、蓮如上人の六男蓮淳さまの顕証寺（現・大津近松）の通寺がありました。教如上人が別派独立なさいますと、了誓、淨恵らは湖南地方六十余ヶ寺の参加を得て、上人のために新堂を建立いたしました。これが今の赤野井別院の始まりです。

教如上人は、慶長十九年（一六一四）十月五日、五十七歳をもって波乱の生涯を終えられました。上人の遺言により赤野井の地にも御廟が設けられました。（↓本堂の南隣）その後、東西両派に改派・帰参が定まって、宝暦（一七五一―一六三）の頃には、ほぼ現状になっていたと考えられています。

これより先、寛文の頃第十四代琢如上人（一六二五―一七一）の息男恵明院如晴（一七一―一七二二）という方が入寺されました。恵明院の在住十数年に及び、この寺を赤野井御坊大恩寺と号されました。恵明院は、後に水戸光圀（一六二八―一七〇〇）の養子となられて、水戸岩船の願入寺（祖師聖人の孫・如信上人開基）に入寺されました。その後、連枝の在住はありませんでしたが、本願寺懸所大恩寺と称し、明治初年に別院制が布かれて現在に至りました。

またこの地は湖南地方の交通の要に位置していたので門前町として栄えました。教団が大きくなりますと、本堂再建の議が定まり、文化六年（一八〇九）現在の本堂が再建されました。総て地元の大工棟梁によって建築されたもので、九間四面、外陣正面に大虹梁をもち、完全な真宗寺院建築様式を具えた、近隣に類をみない文化財であります。